

大正大学附属図書館蔵『土蜘蛛草子』絵巻についての考察

佐藤 圭

一、はじめに

『土蜘蛛草子』^①は、十一世紀に源氏の武将として名を馳せた源頼光の武勇譚が描かれた物語である。頼光とその郎等の渡辺綱が、空飛ぶ髑髏を追いかけた先で神楽岡の古い家に到り、そこに住み着く土蜘蛛を退治するという内容で絵巻化されている。本絵巻は、これまで山姥伝承、ジェンダー史、源氏尊崇、人形芝居などの点で注目され、論じられてきた。^②

土蜘蛛の物語といえは、源頼光が登場して土蜘蛛を退治する内容で、絵巻になっている作品が他にもある。この物語は、頼光を主人公とする点は共通するが、土蜘蛛を退治するのは頼光の家来の四天王たちで、名剣や兵法書など、頼光が英雄たる条件が描かれている。謡曲などにも展開し、広く流布した物語で、慶應義塾図書館所蔵絵巻二軸（以下、慶応本と称する）^③がその代表である。本稿で取り上げる『土蜘蛛草子』は、頼光の英雄譚としては共通するものの、この慶応本『土蜘蛛』とは別の作品である。^④

さて『土蜘蛛草子』の話に戻ると、『土蜘蛛草子』の成立は十四世紀頃とされており、絵画化された土蜘蛛退治譚の絵巻の中では最古の作品である。現存する絵巻は東京国立博物館所蔵本（以下、東博A本と称する）^⑤が最も古く、その当時のものと考えられている。なお、作者については東博A本に添書があり、そこに「絵土佐長隆筆、詞書兼好法師筆」と記され、『古画目録』等には「土佐光顕筆」とある^⑥ことだが、先行研究においては疑義が示されている。^⑦

また、東京国立博物館には、この古写本（東博A本）を模写した模写本がある（以下、東博B本と称する）。その他、現存する『土蜘蛛草子』の伝本は四本あり、大英博物館本、神宮文庫本、^⑧国際日本文化センター所蔵本の三本は先行研究により、最古の写本である東博A本の模写本であるといった指摘がされている。^⑨京都府立京都学・歴史館に所蔵される伝本も、誤写段階での僅少な差があるのみとされ、他の伝本と同様、模写本である。先行研究では、東博A本にある錯簡の問題が指摘され、諸伝本の関係が考察されてきた。^⑩

この度、大正大学附属図書館に、『土蜘蛛草子』の絵巻が所蔵されていることを知った（以下、大正本と称する）。大正本は、これ

まで研究の対象になっていない新出の伝本である。本稿では、諸伝本との比較を通して大正本の特徴を明らかにし、諸伝本間における位置づけを示すことを目的としている。

二、大正大学附属図書館蔵『土蜘蛛草子』書誌

大正本には、各紙の横の寸法、紙面と内容の対照性、書入の有無など、他の伝本には見られない特徴が存在する。これらの特徴について明確にするため、次に大正本の書誌を示す。

- ・形態 絵巻一卷一軸。
 - ・法量 紙高二六・五糎。全長九八一・三糎。
 - ・軸 軸長二七・八糎。直径一・七糎。
 - ・表紙 山吹茶緞子布地。花唐草文様。縦二六・五糎×横二二・三糎。(写真一)
 - ・見返 楮紙。灰色、金箔散。縦二六・五糎×横二二・三糎。
 - ・題簽 なし。外題なし。内題なし。
 - ・書写年代 奥書・識語なし、江戸時代後期の書写か。
 - ・挿絵 九面。
 - ・紙数 三十五紙。
 - ・各紙寸法 【表二】に別記。
 - ・箱 あり。縦二九・三糎。横七・七糎。高さ八・二糎。
- 蓋の裏に「原本、筆者土佐光頭、詞書兼好法師」の記載あり。(写真一・三)

【表二】各紙寸法表 (単位は糎で示す)

紙	寸法(横)
第一紙	三一・八
第二紙	三七・五
第三紙	三七・七
第四紙	三七・二
第五紙	三七・一
第六紙	三七・〇
第七紙	三七・七
第八紙	三〇・八
第九紙	五・二
第十紙	三七・五
第十一紙	三七・五
第十二紙	三七・五
第十三紙	五・二
第十四紙	三一・二
第十五紙	三七・五
第十六紙	三七・五
第十七紙	三七・六
第十八紙	一二・八
第十九紙	二三・八
第二十紙	三七・五
第二十一紙	三七・〇
第二十二紙	二・六
第二十三紙	三四・二
第二十四紙	三七・六
第二十五紙	八・〇
第二十六紙	二九・一
第二十七紙	一〇・五
第二十八紙	二八・〇
第二十九紙	一〇・七
第三十紙	二六・五
第三十一紙	一一・〇
第三十二紙	二四・七
第三十三紙	三七・五
第三十四紙	二一・五
第三十五紙	一二・五 ⁹⁾

【表二】には各紙寸法について示したが、大正本は横の長さの特徴がある。一般的な絵巻の場合、各紙の横の寸法は一定だが、大正本は横の寸法が不定である。大正本の寸法は半分以上が三七糎台であり、第二紙の三七・五糎をはじめ、第三紙、第四紙、第五紙、第六紙、第七紙、第十紙、第十一紙、第十二紙、第十五紙、第十六紙、第十七紙、第二十紙、第二十一紙、第二十三紙、第二十四紙、第三十三紙など、計十七紙がおおよそ三七糎である。しかし、その他の紙

第二十紙	三七・五	詞書八	綱の右の雑草 一行目～三行目
第二十一紙	三七・〇	詞書十	四行目～十七行目
第二十二紙	二・六		
第二十三紙	三四・二	詞書十一	十八行目(終)
第二十四紙	三七・六		
第二十五紙	八・〇	詞書十二	繪十(始)
第二十六紙	二九・一		
第二十七紙	一〇・五	詞書九	紅葉右の枝先
第二十八紙	二八・〇		
第二十九紙	一〇・七	繪十三	紅葉右の枝先
第三十紙	二六・五		
第三十一紙	一一・〇	繪十四	二体の鬼
第三十二紙	二四・七		
第三十三紙	三七・五	繪十四(終)	二体の鬼
第三十四紙	二一・五		

各紙と「詞書・絵」の内容を対照すると、大正本には通常の絵巻とは異なる特徴が確認できる。一般的な絵巻の場合、絵と詞書の紙は分かれており、同じ紙の中に絵と詞書の両方が入ることはあまり

ない。しかし大正本は、第二紙は詞書一から始まるが、詞書を全て終えても紙を変えずにそのまま絵一に移行する。この他にも、第六紙は絵三から詞書二、第七紙は詞書二から絵四、第十紙は詞書三から絵五、第十二紙は絵五から詞書四、第十五紙は絵六から詞書五から絵七、第十六紙は絵七から詞書六、第十七紙は詞書六から絵八、第十九紙は詞書七から絵九、第二十紙は絵九から詞書八、第二十八紙は絵十二から詞書九となっており、絵と詞書で紙を分けずに用いている。そのため大正本は、横の寸法に差がある紙を繋ぎ、各紙の切れ目に関係なく絵や詞書を書いていることがわかり、『土蜘蛛草子』の模写本の一つであると考えられる。

一方で、第四紙から第五紙にかけては紙面の区切れと内容の区切れが一致している。その他、第八紙から第九紙、第十三紙から第十四紙、第十八紙から第十九紙、第二十三紙から第二十四紙、第三十一紙から第三十二紙も同様で、紙面の区切れと内容の区切れが一致している箇所も少なからず存在しているということが指摘できる。さて、大正本の絵の特徴として、他の模写本の伝本には見られない文字の書き入れが存在することが挙げられる。その書き入れの数や内容については、以下の【表三】のとおりである。

【表三】絵中の書き入れ一覧

番号	絵	位置	書き入れ
1	絵三	右上端の縁の下	六曲
2	絵六	右奥美女の足下	白六曲ウシ
3	絵六	右奥美女の着物	白

4	絵六	左手前美女の着物	白
5	絵七	右側尼の頭の被り物	白
6	絵八	左側美女の足下	六
7	絵九	左端山の上	六曲
8	絵十一	左上端の山の上	六曲
9	絵十二	中央山の上	墨減「六曲」
10	絵十三	左下頼光の下	六曲
11	絵十三	左下の頼光の下	六曲
12	絵十四	中央家の下	ウス六曲

文字の書き入れは全部で十二例確認できる。「六」は該当箇所が六青の色であることからおよそ色の指定であると考えることができると。「白」や「ウシ」「ウス」も同様に色について述べていると考えられる。「白」や「ウシ」「ウス」も屏風の形態を示すときに用いられる言葉である。色の指定の記載が絵中にある点は、粉本の可能性もどうかかわせるが、一方で、料紙が粉本で用いられるものより厚いことや、実際に色づけをしている点から、大正本を粉本とすることは難しいと考える。

三、『土蜘蛛草子』伝本について

『土蜘蛛草子』の伝本は、東京国立博物館が所蔵する古写本の東博A本、その古写本を模写した、模写本の東博B本が存在し、その他現存する諸伝本は全て東博B本と同様、東博A本の模写本とされている。また、新たな伝本である大正本の系統は料紙各紙の横の寸

法が一定でないことなどから、『土蜘蛛草子』の模写本である可能性を指摘した。

次に、大正本の位置づけを考えるために諸伝本の系統を確認し、『土蜘蛛草子』の伝本を系統ごとに分類する。須藤氏や山本氏の論考^⑩を参照しつつ伝本を分類し、大正本を加えると次のようになる。

I、古本系

東京国立博物館本

公式ホームページと『続日本絵巻大成』に写真あり。

A本とし、「東博A本」と略す。

『続日本絵巻大成』と『室町時代物語大成』に翻刻あり。

II、模本系

ア東京国立博物館本(模本)

公式ホームページと『続日本絵巻大成』に写真あり。

B本とし、「東博B本」と略す。

イ京都府立京都学・歴史館本

公式ホームページで全文公開済み。「京都本」と略す。

ウ大英博物館本

公式ホームページで全文公開済み。「大英本」と略す。

エ国際日本文化センター本

公式ホームページで全文公開済み。「国日本」と略す。

オ神宮文庫本

未見、「神宮本」と略す。

カ大正大学附属図書館本

「大正本」と略す。

大正本は、東博A本と文字の欠落している箇所や絵の描かれ方がほぼ一致していることから、他の伝本と同じく東博A本の模本であることが考えられる。〔写真四・五〕

四、大正大学附属図書館蔵『土蜘蛛草子』内容・構成

『土蜘蛛草子』は、詞書の一部が欠失しているほか順序にも錯簡

が見られるため、もとの構成を検討する必要がある。なお、東博A本は特に錯簡が多いことから、東博B本との比較により補正の試みが行われてきた。しかし、東博B本も正確な配置ではないとする指摘が上野論⁽¹⁾や小松論⁽²⁾によってされており、本文の解釈については未だ結論をみていない。

次に、大正本を基に『土蜘蛛草子』の本文の解釈を考察するため、本伝本の内容と構成を【表四】として示す。

【表四】大正大学附属図書館蔵『土蜘蛛草子』の内容・構成

〔凡例〕

- ・「詞（行）・絵」は詞書（行数）と絵の区切りごとに分けて示す。
- ・「書出し・登場物等」は詞書の場合は本文の書出しを示し、絵の場合は画面中に描かれているものを示す。
- ・「内容・場面」は詞書と絵についてそれぞれの概括や場面の内容を示す。

詞書（行）・絵	書出し・登場物等	内容・場面
詞書一 （十六行）	みなもとの頼光	頼光と綱は蓮台野で空飛ぶ髑髏に遭遇する。その髑髏を追うとやがて神楽岡の古い家に到り、二人は広い庭へと入っていくが、頼光は綱を置いて更にもう一人の中に入っていく。
絵一	頼光・四天王	頼光と綱、蓮台野で見かけた空飛ぶ髑髏を追い神楽岡の古い家に到る場面。
絵二	頼光・綱	頼光と綱、神楽岡の古い家に入り、その家の縁側で警戒をしているが、やがて頼光は綱を置いて中へと入っていく場面。
絵三 詞書二 （二十一行）	頼光・男女の首女の髑髏 （詞書欠） たいところの障子の	頼光、古い家の部屋を探索していると男女の首や女の髑髏が落ちてくる部屋に到り、刀を抜いて警戒をしている場面。 台所には二百九十歳の異様な姿の老女があり、老女は頼光に自らを殺すように頼むが、頼光は無視して退出する。
絵四	頼光・老婆	頼光が台所で二百九十歳の異様な姿の老女に遭遇し向かい合っている場面。

詞書三 (十七行)	夕やみの程そらのけしき	夕闇の程、雨風、雷が吹き荒れる中、異形異類のものどもが現れ、頼光が睨むと、異形異類のものどもはどうと笑い障子の方に去っていった。
絵五	頼光・異形異類のもの	頼光の前に主に器物であろう異形のものどもが、まるで百鬼夜行のように現れどうと笑う様子を、頼光が座りながら見ている場面。
詞書四 (十六行)	鶏人あかつきを唱へて	暁の頃、頼光が朝を待っていると、楊貴妃や李夫人を思わせる美女が現れて対座し、頼光がその様子を見ていると美女は立ち上がり帰ろうとする。
絵六	頼光・美女	暁の頃、目の前に現れた美女と対座し頼光がその美女を見つめている場面。
詞書五 (八行)	また一人の尼きたれり	頼光の前に一人の尼が現れ、頭二尺、丈は一尺であった。頼光が睨みつけたところ、尼はにこにこ笑いながら雲霞が消えるように消えていった。
絵七	頼光・尼	頼光は、頭二尺、丈一尺の尼と遭遇し対座して尼を睨んでいる場面。
詞書六 (五行)	めもあやなる心地するに	頼光は美女に鞠のような白雲を投げられ、一時的に目がかすむが頼光が刀を抜いて礎石に到達するほど強く斬りつける。
絵八	頼光・美女(絵六と同一人物)	美女(絵六と同一人物)が頼光に向かって白雲を投げつけ、頼光は美女に斬りかかっている場面。
詞書七 (八行)	化人帰りつれば綱きたれり	美女が消えるとそこに綱が駆けつける。刀を確認すると折損はしていたが、刀に白血が着いており、その血の跡を追いかけて西山の奥の洞窟に着く。
絵九	頼光・綱	頼光と綱、美女の血の跡を追いかけて山などを登っている道中の場面。
詞書八 (十八行)	綱かいふやう御剣のさきの	綱は用心して人形を作り、これを前にして洞窟に向かうと、二十丈程の無数の足をもつ土蜘蛛に遭遇し、そこに剣先が飛んできて人形に刺さる。すぐに二人で力を合わせてその土蜘蛛を掴み出す。
絵十	頼光・綱・人形	頼光と綱が人形を前に出し警戒しながら洞窟の方に向かっていく場面。
絵十一	二体の鬼	頼光と綱の前に巨大な二体の鬼が姿を現し歩いてくる場面。
絵十二	頼光・綱・土蜘蛛	頼光と綱は二人で土蜘蛛を押さえ掴み出しながら洞窟から引きずり出す場面。
詞書九 (二十一行)	この物ちからつよくして	頼光と綱は苦戦するが天照大神や正八幡宮に祈願して、いよいよ土蜘蛛を退治する。土蜘蛛の腹からは死人の首が千九百九十個や無数の小蜘蛛が出てきた。その後、古い家を燃やし、褒美として朝廷から二人は新たな官位をもらう。
絵十三	頼光・綱・土蜘蛛・小蜘蛛・髑髏	頼光と綱、土蜘蛛を斬り退治する。大量の首や無数の小蜘蛛が出てくる場面。
絵十四	頼光・綱	頼光と綱が神楽岡の古い家を二人で燃やし、その様子を見ている場面。

『土蜘蛛草子』は、先行研究において、諸伝本の詞書一の髑髏が空を飛んでいる場面の絵と絵三の頼光が男女の首や女の髑髏に遭遇する場面の詞書、以上の二つの箇所が欠落しているといった指摘がされている¹³⁾。また、大正本、東博A本、東博B本などの各伝本を比較すると、いずれも絵や詞書の順序が異なっていることが確認できる。模写本系の諸伝本においては、全て東博B本の構成と同じであるため、大正本、東博A本、東博B本の構成を対照するために【表五】を示し比較を行う。

【表五】『土蜘蛛草子』各伝本の構成対照表

〔凡例〕

- ・構成を詞書と絵に分け、各伝本の登場する順に示した。
- ・詞書と絵は、各伝本間で共通するブロックについては点線で区切り示した。
- ・上段には大正本、中段には東博A（古本系）、下段には東博B（模本系）の内容を示した。
- ・各伝本の順番で差異が確認できる箇所は太文字で示した。

大正本	東博A本	東博B本
<p>【I】 (詞書一) 頼光と綱は髑髏を追い神楽岡の古い家に着く。 (絵一) 頼光と綱は神楽岡の古い家に着く。 (絵二) 頼光、綱を置いて一人で家の中に入っていく。</p>	<p>【I】 (詞書一) 頼光と綱は髑髏を追い神楽岡の古い家に着く。 (絵一) 頼光と綱は神楽岡の古い家に着く。 (絵二) 頼光、綱を置いて一人で家の中に入っていく。</p>	<p>【I】 (詞書一) 頼光と綱は髑髏を追い神楽岡の古い家に着く。 (絵一) 頼光と綱は神楽岡の古い家に着く。 (絵二) 頼光、綱を置いて一人で家の中に入っていく。</p>
<p>【II】 (絵三) 頼光、男女の首と女の髑髏がある部屋に至る。</p>		
<p>【III】 (詞書二) 頼光、台所にて二百九十歳の老婆に遭遇する。 (絵四) 頼光、台所にて二百九十歳の老婆に遭遇する。</p>	<p>【III】 (詞書二) 頼光、台所にて二百九十歳の老婆に遭遇する。 (絵四) 頼光、台所にて二百九十歳の老婆に遭遇する。</p>	<p>【III】 (詞書二) 頼光、台所にて二百九十歳の老婆に遭遇する。 (絵四) 頼光、台所にて二百九十歳の老婆に遭遇する。</p>

	<p>【Ⅵ】(詞書五) 頼光、頭二尺丈一尺の尼に遭遇する。 (絵七) 頼光、頭二尺丈一尺の尼に遭遇する。</p> <p>【Ⅱ】(絵三) 頼光、男女の首と女の髑髏がある部屋に至る。</p>	<p>【Ⅱ】(絵三) 頼光、男女の首と女の髑髏がある部屋に至る。</p>
	<p>【Ⅷ】(詞書八) 頼光と綱、人形を盾に土蜘蛛を洞窟から掴み出す。 (絵十) 頼光と綱、人形を前にして先を行く。 (絵十一) 頼光と綱、巨大な二体の鬼に遭遇する。 (絵十二) 頼光と綱、土蜘蛛を洞窟から掴み出す。</p>	
<p>【Ⅳ】(詞書三) 頼光、異形異類のものどもに遭遇する。 (絵五) 頼光、異形異類のものどもに遭遇する。</p> <p>【Ⅴ】(詞書四) 暁の頃、頼光の前に美女が現れ頼光を見る。 (絵六) 頼光の前に美女が現れ頼光を見つめる。</p>	<p>【Ⅳ】(詞書三) 頼光、異形異類のものどもに遭遇する。 (絵五) 頼光、異形異類のものどもに遭遇する。</p>	<p>【Ⅳ】(詞書三) 頼光、異形異類のものどもに遭遇する。 (絵五) 頼光、異形異類のものどもに遭遇する。</p>
<p>【Ⅵ】(詞書五) 頼光、頭二尺丈一尺の尼に遭遇する。 (絵七) 頼光、頭二尺丈一尺の尼に遭遇する。</p>	<p>【Ⅴ】(詞書四) 暁の頃、頼光の前に美女が現れ頼光を見る。 (絵六) 頼光の前に美女が現れ頼光を見つめる。</p>	<p>【Ⅵ】(詞書五) 頼光、頭二尺丈一尺の尼に遭遇する。 (絵七) 頼光、頭二尺丈一尺の尼に遭遇する。</p> <p>【Ⅴ】(詞書四) 暁の頃、頼光の前に美女が現れ頼光を見る。 (絵六) 頼光の前に美女が現れ頼光を見つめる。</p>

<p>【VII】 (詞書六) 頼光、美女に白雲を投げられれ刀で斬りかかる。 (絵八) 頼光、美女に刀で斬りかかる。 (詞書七) 頼光と綱、血の跡を追いかけて洞窟に着く。 (絵九) 頼光と綱、血の跡を追って移動する。</p>	<p>【VII】 (詞書六) 頼光、美女に白雲を投げられれ刀で斬りかかる。 (絵八) 頼光、美女に刀で斬りかかる。 (詞書七) 頼光と綱、血の跡を追いかけて洞窟に着く。 (絵九) 頼光と綱、血の跡を追って移動する。</p>	<p>【VII】 (詞書六) 頼光、美女に白雲を投げられれ刀で斬りかかる。 (絵八) 頼光、美女に刀で斬りかかる。 (詞書七) 頼光と綱、血の跡を追いかけて洞窟に着く。 (絵九) 頼光と綱、血の跡を追って移動する。</p>
<p>【VIII】 (詞書八) 頼光と綱、人形を盾に土蜘蛛を洞窟から掴み出す。 (絵十) 頼光と綱、人形を前にして先に行く。 (絵十一) 頼光と綱、巨大な二体の鬼に遭遇する。 (絵十二) 頼光と綱、土蜘蛛を洞窟から掴み出す。</p>	<p>【IX】 (詞書九) 頼光と綱、土蜘蛛を退治し古い家を燃やす。 (絵十三) 頼光と綱、土蜘蛛を退治する。 (絵十四) 頼光と綱、神楽岡の古い家を燃やす。</p>	<p>【IX】 (詞書九) 頼光と綱、土蜘蛛を退治し古い家を燃やす。 (絵十三) 頼光と綱、土蜘蛛を退治する。 (絵十四) 頼光と綱、神楽岡の古い家を燃やす。</p>

各伝本を比較したときに、いずれの伝本においても異なった配置をしていた箇所は、以下①、②として示した二点である。なお、該当箇所の図版を、「付録」大正大学附属図書館蔵『土蜘蛛草子』詞書、絵」に載せているため、本文に記した写真番号をもとに参照していただきたい。

①【VI】(詞書五)(絵七)の位置。大正本は、【VI】(詞書五)(絵七)頼光が頭二尺丈一尺の尼に遭遇する場面【写真七】が、【V】

(絵六) 頼光の前に美女が現れ頼光を見つめる場面【写真六】と、【VII】(詞書六) 頼光、美女に白雲を投げられれ刀で斬りかかる場面【写真八】の間に配置されている。
②【II】(絵三)の位置。大正本は、【II】(絵三) 頼光、男女の首と女の髑髏がある部屋に到る場面【写真十】が、【I】(絵二) 頼光、綱を置いて一人で家の中に入っていく場面【写真九】と、【III】(詞書二) 頼光、台所にて二百九十歳の老婆に遭遇する場面【写真

十一) の間に配置されている。

以下、具体的に説明する。まず①の点であるが大正本の【VI】(詞書五)(絵七)の位置が、他の伝本に比べて後ろの方に描かれている点である。大正本の構成では、【V】(詞書四)(絵六)で楊貴妃か李夫人を思わせる美女に遭遇し、【VI】(詞書五)(絵七)で頭二尺、丈一尺の尼に遭遇する。その後、【VII】(詞書六)(絵八)で頼光は先ほどの美女に鞠のような白雲を投げられ、美女を刀で斬りつけていくといった展開となり、展開に矛盾が生じる。補正した東博A本も大正本と同様である。一方、東博B本の構成では、【VI】(詞書五)(絵七)は【IV】(詞書三)(絵五)異形異形のものどもに遭遇する場面の後に位置づけられており、この配置は内容に矛盾が生じていない。また、東博B本では【V】(詞書四)(絵六)の一度目の美女との場面と【VII】(詞書六)(絵八)の二度目の美女との場面は連続した構成となっている。この構成に基づく、一度目に美女が出てくる場面の最後に美女は立ち上がり退出する素振りをして頼光を油断させ、二度目の美女の場面で鞠のような白雲を頼光に投げつけるといった巧妙な作戦が繰り広げられており、この解釈は適切であると考えられる。しかし、大正本ではその間に【VI】が配置されていることで、突然別の鬼物である尼が登場し、前後の話の繋がりが失われ構成が破綻する。

また、東博A本が不適當である理由は、時系列から推知することができる。東博A本は、【VI】(詞書五)(絵七)が【IV】(詞書三)(頼光、異形異類のものどもに遭遇する場面より前に配置されているが、この配置では矛盾が生じる。(詞書五)では、尼が「とうたい

のもとに、あよりて、火をけをとす」とあることから、この場面は夜でなければならぬ。しかし、夜になるのは【IV】(詞書三)の冒頭「夕やみの程、そらのけしき、た、ならずなりぬ」からであり、東博A本ではこの順番が逆転している。この配置では、夜になる前に灯台に火がついていることになるため、構成が破綻してしまうのである。以上のことから、【VI】(詞書五)(絵七)の位置は大正本や東博A本の配置よりも、いずれの矛盾点にも該当しない東博B本の配置の方が適當であると考えられる。

②は、大正本の【II】(絵三)の位置が、他の伝本に比べて前の方に描かれている点である。大正本の構成では、冒頭で頼光は【I】(詞書一)(絵一)(絵二)で空飛ぶ髑髏に遭遇し、その髑髏を追いかけて神楽岡の古い家に到り、頼光は綱を置いて一人で家の中へと入る。その後、【II】(絵三)男女の首や女の髑髏が置かれている部屋に着いて、頼光は刀を抜いて身構える。この後の展開では【III】(詞書二)(絵四)で初めて二百九十歳の異様な姿の老婆に遭遇し、その後様々な鬼物と対峙していくという展開になる。東博A本では(絵七)頼光が頭二尺、丈一尺の尼に遭遇し、(絵三)男女の首と女の髑髏の部屋に着いた後に(詞書八)頼光と綱が人形を盾に土蜘蛛を洞窟から掴み出す構成になっており、東博B本では(絵四)二百九十歳の老女に遭遇した後に、(絵三)男女の首と女の髑髏の部屋を一度経由して(詞書三)異形異類のものどもに遭遇するという構成となっている。

内容の繋がりにおいて、東博A本や東博B本の古い家に入ってから鬼物と遭遇する展開は余りにも唐突である。また、東博A本に

ついで、この後に話が土蜘蛛の退治する場面まで飛んでいることが指摘できる。しかし、大正本の構成では、頼光は空飛ぶ髑髏を追いかけて到った神楽岡の古い家に入り、最初の部屋で男女の首や女の髑髏に遭遇する。この一場面を挟むことで、この家には人を殺めて喰うような鬼物が存在するのではないかと頼光は予感する。こうした展開を踏まえ、その後二百九十歳の老女を初めとする様々な鬼物に遭遇していくことは自然であり、東博A本や東博B本より構成が適当であるため、大正本の配置が適切であると考えられる。

また、先行研究では、東博B本の配置の指摘をした上野論や小松論に改めて注目したい。この二人は、錯簡が生じる前の形を残すとされている東博B本も、詞書の欠落などから正確な配置ではないとして、新たに補正を行った構成表を示している。なお、二人が各々作成した『土蜘蛛草子』の構成は完全に一致し、東博B本と比較すると配置が異なる箇所は一つである。そして、その補正された箇所というのが、【II】(絵三) 頼光が男女の首や女の髑髏が置かれている部屋に到る場面であり、その配置は【I】(絵二) 頼光が綱を置いて一人で家の中に入る場面と【II】(詞書二) 台所にて二百九十歳の老婆に遭遇する場面に位置する。大正本の構成については【表四】で既に述べたが、この(絵三)の配置が上野論や小松論が補正して示したあるべき順と一致している。このことを踏まえると、【II】(絵三) 頼光が男女の首や女の髑髏が置かれている部屋に到る場面は、大正本の構成が最も適切であると考えられる。

構成の検証については以上である。『土蜘蛛草子』の模写本である大正本と東博B本に配置の違いが生じてしまう原因は、写された

時代によって東博A本の配置に違いが生じていた可能性がある。このことによって同じ模本系の伝本の間であってもその構成に差異が生じているのではないかと考える。

五、おわりに

以上、大正大学附属図書館蔵『土蜘蛛草子』について、他の伝本との比較を基に行うことでその特徴を明らかにしてきた。大正本は新出の伝本である。横の寸法に差がある紙を繋ぎ、各紙の切れ目に関係なく絵や詞書が書かれていることから『土蜘蛛草子』の模写本である可能性を指摘した。また、東博A本と絵や詞書がほぼ一致していることなどから、東博A本の模写本の系統であることを確認した。

構成については、大正本は他の伝本とは絵や詞書において異なる箇所が二つ存在することを述べた。第一に大正本や東博A本の【VI】(詞書五)(絵七)の配置では、前後の詞書との繋がりが失われ構成が破綻してしまつたため、東博B本が最も適切であることを指摘した。第二に大正本の【II】(絵三)の位置についてであるが、内容の繋がりにおいて、大正本の【I】(絵二)と【III】(詞書二)の間に【II】(絵三)が位置する構成が最も適切な解釈であり、また、先行研究において補正の必要が指摘された構成表の(絵三)の新たな配置が大正本の構成と一致することから、【II】(絵三)の頼光が男女の首や女の髑髏が置かれている部屋に到る場面は、大正本が内容展開に沿った配置であることが確認できた。

以上のことから、大正本は、東博A本の模写本系統の一本であることを示してきた。しかし、東博B本を初めとする模本と比較すると、構成や絵中の書き入れの有無などの面で大正本とは異なるため、全く同じ系統として分類することはできない。そこで、今までの模本系の諸伝本は甲類とし、大正本は異なった特徴を有する模本系の別の伝本として、乙類として別に立てることにする。

今後、東博A本を直接模写した可能性など、東博A本との関係について更に検証していきたい。

【注】

(1)『土蜘蛛草紙』『土蜘蛛の草子』と表記する場合もあるが、本稿では『土蜘蛛草子』とする。

(2)これまでその内容については、須藤真紀「『土蜘蛛草紙』成立の背景をめぐって」(『説話文学研究三七、二〇〇二年六月)では、『土蜘蛛草子』を山姥伝承の過程に位置づけようとする考察、水野僚子「土蜘蛛草紙に描かれた女性の身体―凶像と解釈―」(『ジェンダー史叢書四視覚表象と言説の再生産をめぐって』)、「ジェンダー史叢書四視覚表象と音楽」明石書店、二〇一〇年)では、ジェンダーの観点から『土蜘蛛草子』を考察し、男性観者の女性恐怖や去勢不安を克服する物語という新たな解釈、本多康子「東京国立博物館蔵『土蜘蛛草紙』の物語フレーム再考」(『中世絵画のマトリックスII』青簡舎、二〇一四年)では、『土蜘蛛草子』を英雄による怪物退治の武勇譚として、それを成し遂げた源氏の武将といった「源氏尊崇」へと巧妙に焦点を絞るものであったという

論、山本陽子「東京国立博物館本『土蜘蛛草紙』絵巻と人形芝居―特異な筋立てと絵画表現の理由について―」(『明星大学研究紀要(人文学部・日本文化学科)』二三、二〇一五年三月)では、『土蜘蛛草子』を実際に上演された人形芝居の舞台に基づいて作られた絵巻であるとして成立を考察するなど、多様な視点で検討されてきた。

(3)大正本は、東京国立博物館所蔵『土蜘蛛草子』の絵巻と同作品である。しかし、中世の土蜘蛛退治譚は『土蜘蛛草子』の他に、もう一種類存在するので注意したい。こちらは、「瘡病型」とされており、概括としては、瘡病で倒れた頼光のもとに僧形をした土蜘蛛が現れて襲いかかる。頼光が剣で斬りつけると僧は逃げていくが、後にこの僧は四天王によって退治されるといった話である。代表されるものは慶應義塾図書館所蔵『土くも』、国立国会図書館所蔵『平家物語剣之巻』、国立歴史民俗博物館所蔵『土蜘蛛草子』であり、その他『太平記』等でもこの分類の土蜘蛛退治譚は語られている。謡曲などにも展開し、広く流布した土蜘蛛退治譚である。本稿で取り上げる『土蜘蛛草子』とは別の作品になるが、土蜘蛛の研究としては極めて重要なものである。

(4)『土蜘蛛草子』の概要は上野憲示「土蜘蛛草紙について」(『続日本絵巻大成』一九、中央公論社、一九八四年)を参照した。作者については、小松茂美「『土蜘蛛草紙』『天狗草紙』『大江山絵詞』―異類・異形の物語―」(『続日本の絵巻二六土蜘蛛草紙天狗草紙大江山絵詞』中央公論社、一九九三年)において、土佐

長隆が十三世紀初めの人物で、兼好法師は十四世紀初めからごろの人物であることから、二人の生存年代に一世紀ほどの差が生じるとの指摘がある。また村重寧「土蜘蛛草紙」(『御伽草子絵巻』角川書店、一九八二年)は、土佐光顕も室町初期以前の土佐派の存在自体が明らかでないため妥当性に欠けているとする。

(5) 大英博物館本、神宮文庫本の二本が東博Aの模写本であることは、奈良絵本国際研究会編『御伽草子の世界』(三省堂、一九八二)により明らかとされている。

(6) 国日本が模写本であるという指摘は、山本陽子「東京国立博物館本「土蜘蛛草紙」絵巻と人形芝居―特異な筋立てと絵画表現の理由について―」(『明星大学研究記要(人文学部・日本文化学科)』二二二、二〇一五年三月)にある。

(7) 京都本の伝本研究は須藤真紀「『土蜘蛛草紙』成立の背景をめぐって」(『説話文学研究』三七、二〇〇二年六月)によって指摘がされている。

(8) 錯簡については、早くは、田中一松「土蜘蛛草紙」(『日本絵巻物集成』二、雄山閣、一九二九年)が指摘し、その後、上野憲示「土蜘蛛草紙について」(『続日本絵巻大成』一九、中央公論社、一九八四年)、小松茂美「土蜘蛛草紙」「天狗草紙」「大江山絵詞」―異類・異形の物語―(『続日本の絵巻二六土蜘蛛草紙天狗草紙大江山絵詞』中央公論社、一九九三年)などに指摘がされている。

(9) 第三十五紙は、軸装を改めるときに付された後補の料紙であ

る。楮紙。灰色、金箔散。縦二六・五糎×横十二・五糎。

(10) 伝本の分類は、須藤真紀「『土蜘蛛草紙』成立の背景をめぐって」(『説話文学研究』三七、二〇〇二年六月)や山本陽子「東京国立博物館本「土蜘蛛草紙」絵巻と人形芝居―特異な筋立てと絵画表現の理由について―」(『明星大学研究記要(人文学部・日本文化学科)』二二三、二〇一五年三月)を参照しながら行い、新たに大正本を加えた。

(11) 「絵三」の錯簡の指摘は、上野憲示「土蜘蛛草紙について」(『続日本絵巻大成』一九、中央公論社、一九八四年)でされており、「絵三」の新たな位置について考察がされている。

(12) 「絵三」の新たな位置を述べた上野論は、小松茂美「土蜘蛛草紙」「天狗草紙」「大江山絵詞」―異類・異形の物語―(『続日本の絵巻二六土蜘蛛草紙天狗草紙大江山絵詞』中央公論社、一九九三年)で肯定されており、ここでもそれを踏まえた構成により、内容が説明がされている。

(13) 「土蜘蛛草紙」の欠落の指摘は上野憲示「土蜘蛛草紙について」(『続日本絵巻大成』一九、中央公論社、一九八四年)の「土蜘蛛草紙」の復元と内容」で行われており、小松茂美「土蜘蛛草紙」「天狗草紙」「大江山絵詞」―異類・異形の物語―(『続日本の絵巻二六土蜘蛛草紙天狗草紙大江山絵詞』中央公論社、一九九三年)の構成表においても、同じ箇所の欠落が指摘されている。

(14) 東博A本の詞書は、横山重、松本隆信編『室町時代物語大成 第九』(角川書店、一九八一)の翻刻を参考にした。

〔付記〕 貴重な資料の閲覧に際して、大正大学附属図書館には大変お世話になりました。心より御礼申し上げます。また本稿は、二〇二一年一月二六日大正大学大学院国文学専攻研究発表会における口頭発表をもとに執筆したものです。発表の席上、御教示を賜りました先生方に、深く感謝申し上げます。

【付録】大正大学附属図書館蔵『土蜘蛛草子』詞書・絵

【写真一】『土蜘蛛草子』現装



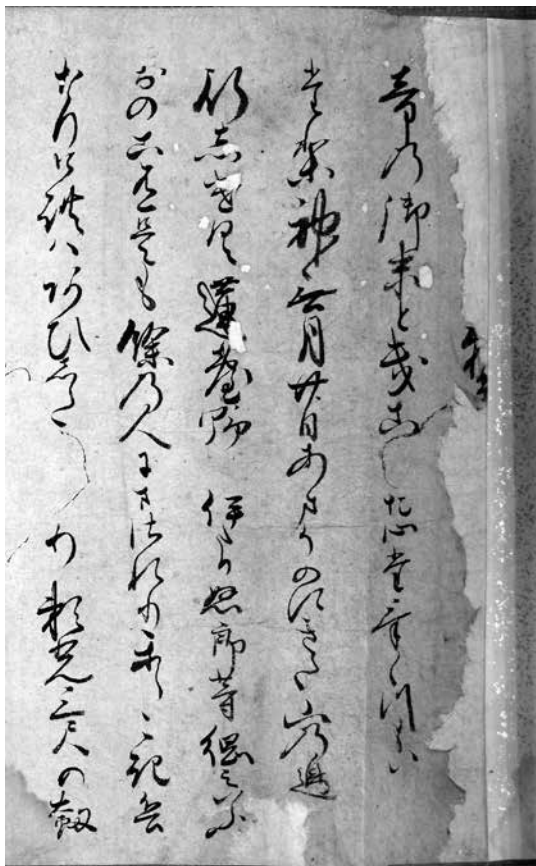
【写真二】『土蜘蛛草子』箱



【写真三】『土蜘蛛草子』箱蓋の裏書

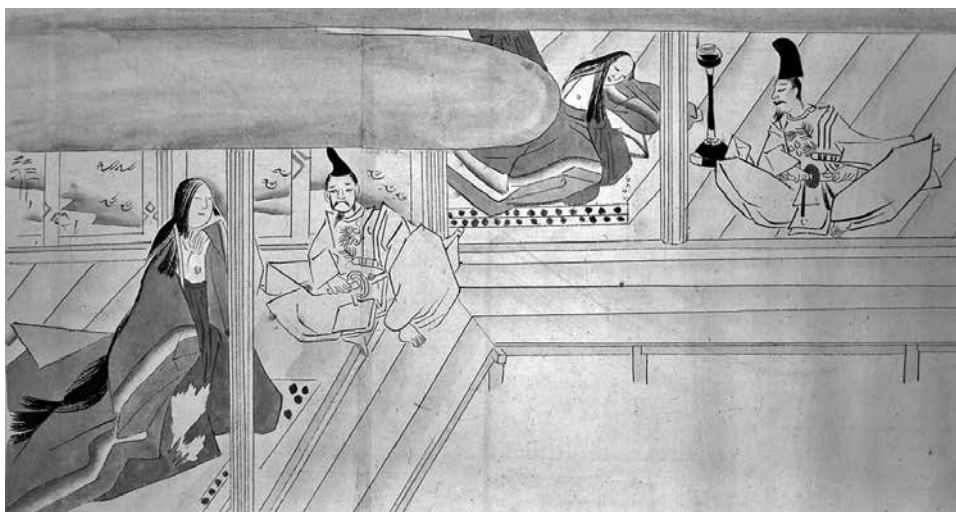


【写真四】『土蜘蛛草子』冒頭部（詞書一）





【写真五】 頼光と綱、土蜘蛛を退治する場面（絵十三）



【写真六】 頼光の前に美女が現れる（絵六）



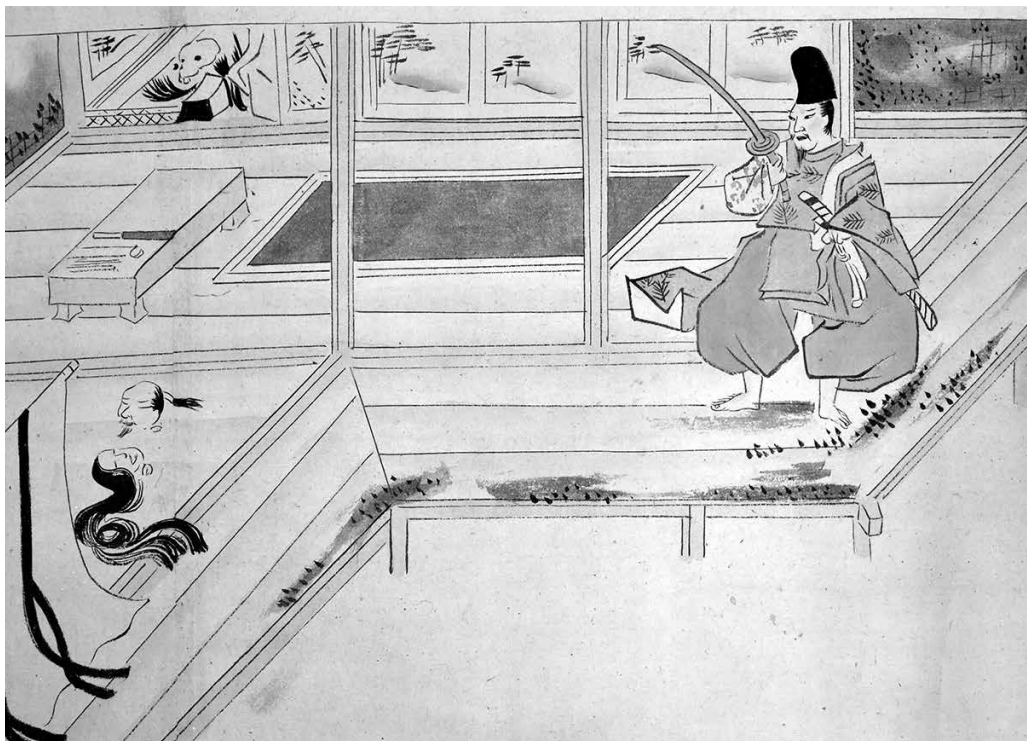
【写真七】 頭二尺丈一尺の尼に遭遇（絵七）



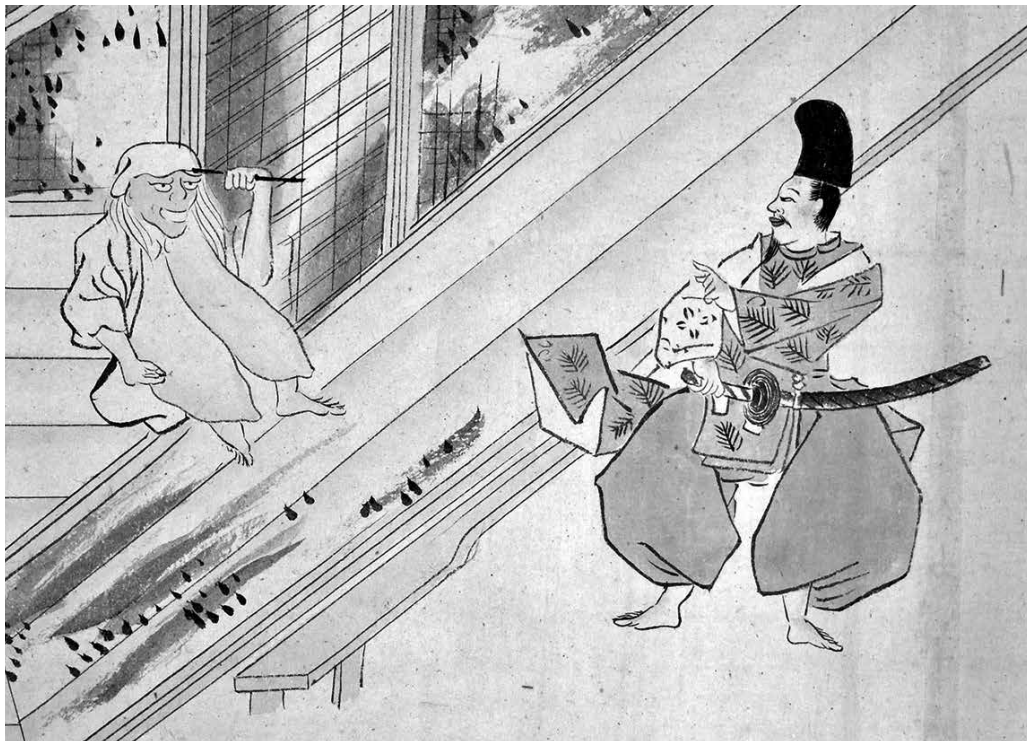
【写真八】美女を刀で斬りつける（絵八）



【写真九】網を置き一人で中に入る（絵二）



【写真十】男女の首と髷に遭遇（絵三）



【写真十二】二百九十歳の老婆に遭遇（絵四）